

子宮頸がんワクチンについて

2013年6月改訂版

WHAT'S NEW?

2013年4月より子宮頸がんワクチン（HPVワクチン）は「小学6年生から高校1年生に相当する年齢の女性」を対象に、定期接種になりました。現在も定期接種であることには変わりありませんが、接種後の持続する痛み（CRPS：複合性局所疼痛症候群といいます）が認められ、ワクチンとの因果関係がはっきりしないことから積極的な接種勧奨は差し控えられています（2013年6月現在）。

HPVワクチンのメリット・デメリットをよくご理解の上、接種をしてください。

●下記サイトより厚生労働省のリーフレットをご覧ください

http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou28/pdf/leaflet_h25_6_01.pdf

子宮頸がんって何ですか？

いわゆる子宮がんには子宮頸がんと子宮体がんがあります。子宮頸がんは、婦人科領域のがんの中で乳がんについて発症率が高く、20～30代の若い女性のあいだで近年急増しています。

子宮頸がんの主な原因はウイルスです。今回のお話はワクチンでウイルスが感染しないようにしようというものです。

子宮頸がんの原因は？

子宮頸がんの原因はヒトパピローマウイルス（HPV）というウイルスのうち、発がん性をもったHPV16型や18型が主であるといわれています。これらは性的接触によって感染しますが、約90%のひとでは自然に排除されます。しかし、約10%はそのまま感染が持続し、一部のひとでは数年から十数年かけてがん化します。実際のがん化するのは発がん性HPV（主に16型・18型）に感染したひとの1%未満ですが、日本では年間15000人が子宮頸がんを発症し、そのうち約3500人が亡くなっています。

また、HPVの自然感染では抗体産生（免疫ができる）が十分でなく、いったん排除されても性的接触で何度でも感染を繰り返します。

HPVワクチンとは？

①2種類のワクチン

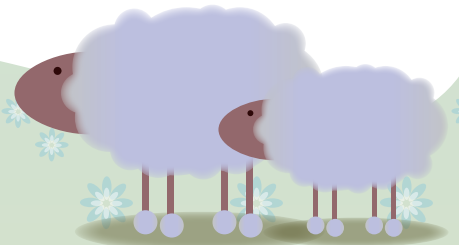
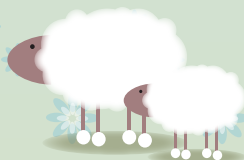
HPVワクチンは現在、2種類あり、サーバリックスとガーダシルです。

サーバリックスはHPV16型・18型に対して予防効果があり（2価）、ガーダシルはHPV 6型・11型・16型・18型に予防効果があります（4価）。子宮頸がんの主な原因はHPV16型・18型ですので、子宮頸がんの予防効果は2者で優劣ないようです。予防接種により抗体を産生（免疫をつくる）し、発がん性HPVの持続感染を90%以上予防できます。

ガーダシルはHPV 6型・11型も予防でき、子宮頸がんの他に外陰上皮内腫瘍・膣上皮内腫瘍・尖圭コンジローマにも予防効果があります。

効果の持続についてはデータが不十分ですが、サーバリックスは新しく開発したアジュバント（体内で免疫応答を強める成分）が入っており、推定で20年くらいは効果が持続すると言われていますが、ガーダシルの効果持続期間も変わらないとされています。

≫ 裏面へ



②副反応

接種後の副反応についてご心配な方も多いでしょう。多くの人に接種部位の痛みや発赤、腫れが認められ、接種後に疲労、筋肉痛、頭痛などがおこる人もいます。ワクチン接種後にふらつきが認められる方がいますので、接種後30分は座ったり横になったりして安静を保つとよいでしょう。また、接種後に持続する疼痛（CRPS：複合性局所疼痛症候群）が見られることがあります。因果関係は不明です。CRPS自体はHPVワクチン特有のものではなく、採血やその他日常の怪我がきっかけで起こることもあります。

●副反応についてより詳しく知りたい方は下記サイト厚生労働省の会議資料をご覧ください。
<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r98520000034g8f.html>

③接種対象と接種方法

定期接種：小学6年生から高校1年生に相当する年齢の女性（ただし、現在積極的な接種勧奨は差し控えられています）

※ HPVワクチンは全3回の接種で半年ほどかかります。接種開始が遅くなると3回目が任意接種となり、自費になることがあります。

サーバリックス：1回目、2回目：初回より1ヵ月後、3回目：初回より6ヵ月後

ガーダシル：1回目、2回目：初回より2ヵ月後、3回目：初回より6ヵ月後

他の予防接種と違い、皮下注射ではなく、筋肉注射です。なお、2つのワクチンを途中で切り替えること（例：1回目をサーバリックス、2回目以降をガーダシル）はできません。初回に接種したワクチンを2回目、3回目とも接種します。

なお、当院ではガーダシルを採用していますが、特にサーバリックスをご希望の方はご希望に沿うようにいたします。お問い合わせください。

小児科でHPVワクチンを接種するワケ

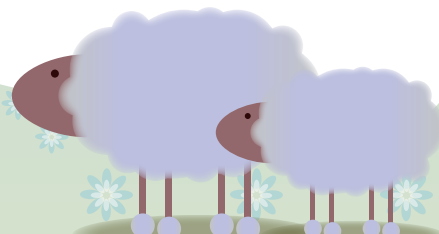
小さなお子さまをもつ親御さんには、その子の子宮頸がん予防というのは遠い話のように聞こえるかもしれませんが、がんは「なってから」考えるより「ならないようにする」ほうがずっと楽ですし、安心です。

こども達をとりまく環境は年々変化しています。インターネットや携帯電話などから不適切な性に関する情報があふれています。そのため、性交開始年齢がさがっています。ある報告では中学生で4～10%、高校1年生で約10～15%、高校3年生では約30～40%に性交渉の経験がありました。しかも、男子より女子の方が経験率は高かったのです。

子宮頸がんワクチンの接種は性交渉開始前が最も効果的とされていますので、上のデータからすると小学校高学年から中学生で接種をしたほうがよいこととなります。小学生から中学生は通常、小児科を受診することが多いので、ここで小児科の出番になります。子宮頸がんワクチンは産婦人科・内科などでも接種していますが、年頃の女の子を産婦人科に連れて行きづらいという場合は小児科での接種を考えてみてください。

誤解しないでいただきたいのですが、私は子宮頸がんワクチンの接種をすすめることによって性の低年齢化をすすめているわけではありません。ただ、われわれの想像以上にこども達をとりまく性の環境が変化してきているということは確かです。それを踏まえた子宮頸がんワクチン接種が必要で、日本産婦人科学会と日本小児科学会でも11～14歳の女の子に優先接種するように強く推奨しています。

≫次ページへ



親子で性について話し合う機会を

性感染症にはHPVだけでなくクラミジア・淋菌感染症・性器ヘルペス・梅毒からHIV（エイズウイルス）などさまざまな感染症があります。最近では高校生のクラミジア感染も増えています。このワクチンで防げるのはHPVだけです。その他の性感染症を防ぐためにも大事なことは、きちんとした性教育により、自分の心とからだを守る知識をつけることです。こどもへの性教育については賛否両論さまざまな意見がありますが、「自分を好きになる」「自分の心とからだを守ることできる」性教育について一度考えていただくと嬉しいです。

HPVワクチン接種は性について親子で話し合う、よい機会になるのではないのでしょうか。

お母さまへの接種も考えてみてください

性交渉開始後の接種でも発がん性HPVの予防ができるという報告があり、お母さまへの接種も可能です。日本産婦人科学会の声明では15～45歳の女性にも接種を推奨しています。小学6年生～高校1年生以外は任意接種となり自費になります。小児科でお子さんといっしょに接種することもできますので、お母さまへの接種についてもお気軽にご相談ください。自由が丘メディカルプラザでは内科・小児科ともに子宮頸がんワクチンに対応しております。

HPVワクチンのメリット・デメリットをよくご理解の上、接種をしてください。

※このコラムのワクチンの情報は、2013年6月21日現在のものです。
最新の情報は、自由が丘メディカルプラザ小児科のホームページ
(<https://www.jiyugaokamp.com/s/index.html>)
にてご確認ください。

2013年6月21日 改訂
高嶋 能文



たかしま よしふみ

高嶋 能文

山梨医科大学卒
日本小児科学会専門医
日本血液学会血液専門医
日本がん治療認定医
日本性感染症学会会員
日本エイズ学会会員

自由が丘メディカルプラザ 小児科
東京都目黒区自由が丘2-11-16
日能研ビル2F

TEL : 03-5731-3565

